

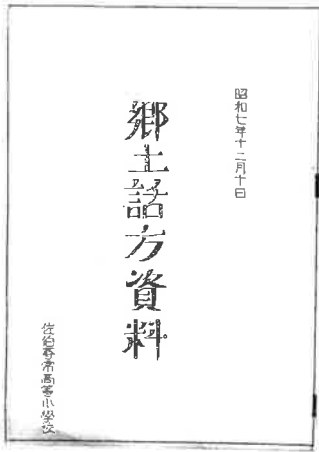
郷土話方資料(3)

— 今から七十年前 昭和七年十二月十日

佐伯尋常高等小学校

紹介者 山本 保

(会員 佐伯市池船町)



(三) 千人塚

毛利氏が、佐伯の殿様となる前には、佐伯氏といふ殿

様が、十四代程もつづいて、佐伯に居られました。今の鶴岡村にある梅牟礼城趾が、そのお城でありました。

代々、皆おえらい方ばかりでしたが、中にも、佐伯氏最後の殿様である佐伯惟定公の時に、あの勇敢な薩摩隼人の島津軍を打ち破った、勇ましい話があります。

今からおよそ、三百五十年程前、即ち天正十四年の秋の半ば頃、島津軍は、我が佐伯の武勇の名の高いのを知って、島津氏の家来になるやう、すすめて来ました。佐伯氏は、もともと大友氏の家来で、度々戦をしていました。で佐伯氏を味方にとり込むのと、とり込まないのでは、島津氏にとっては、大きい問題であった。

佐伯太郎といはれた惟定公は、その使の来た折、まだやつと十八才でありました。

島津氏に随はなければ、どうしても島津氏と戦をしなければなりません。

大友氏には、代々御恩があります。

先祖の方々の中でも、島津氏のために苦しめられた方もあります。

惟定公は、佐伯方の態度をきめるために、評議を開きました。色々議論したあげく、遂に島津氏には随はないといふことに決つたのです。

即ち、佐伯氏の武士は、決死の覚悟をきめて、使の者十九人を番匠川の淵にさそつて、殺してしまつた。

島津軍はたいそう怒つて、佐伯の城を攻め落さずにおくものかと、勢よく攻めよせて来ました。その時の兵力は、約二千人と言はれてゐます。

佐伯にとつては、実に重大な事がありました。こちらも佐伯武士です。決して驚きません。

大将惟定公は、八百人程の兵をして、明治村大坂本・番匠川原・中野村の三方を守らせ、別に千八百人程の兵で、この島津軍に向はせました。

敵は、蒲江の方から攻め込んで、その先陣は、もう上堅田村の城村まで来て居り、後陣は、下堅田の汐月まで来てゐました。

佐伯方には、山田匡徳といふ、計略のうまい大将が居

て、我軍を三隊に分け、一隊は、後陣の汐月の敵を攻めさせました。

敵は、不意の出来事に驚いて、散々負けて退却しました。又、一隊は大まはりをして、下堅田の鵜山城趾に上つて、この敵を攻撃しましたので、敵には浮足が立つて来ました。

こうなれば、敵は戦をする勇氣も、くじけてしまいました。

因尾方面の佐伯軍が、この敵を攻めたけれど、最初は味方の敗戦でした。

これではならぬと、二度目に、兵をそろへて攻めました。その時、この戦は実に火花の散る戦だつたと、いひますが、さすがの島津軍も、散々に打ち破られて、ほうぼうの態で逃げて、味方に合わせねばなりませんでした。

汐月から退却した敵は、青山村の方に逃げる予定だつたのですが、下堅田の竹角に、我が佐伯の大軍が待ちかまへてゐたので、それも出来ず、府坂峠に逃げ込みました。

実は、大軍が居ったのではなく、計略をもって、そうみせかけたのです。

もう、こうなつては、敵はふくろのねずみ同様、両方から征め立てられて、長瀬原、また千人原とも、いひますが、ここに、なだれを打って逃げこんで、大越からにげやうとしました。

この時、我が軍のものが、敵の大將の馬印を立てましたので、敵は争つて、そこえ集つて来ました。これも計画通りに行きました。

我が兵は、十往無尽に、敵を斬りまくりました。何人ころしたか、わからぬ程です。ほとんど、大部分の敵兵がころされて、ほんのわずかだけ、大越の方から逃げたと申します。

佐伯軍の大勝利です。

この大勝利のために、佐伯の城も安全でありました。惟定公は、この敵の戦死者のために、小さなほこらと、塚を立てて、その後世をとむらつてやつたと、申します。

この塚が千人塚で、今も上堅田村にのこつてゐて、当時の勇ましい戦を、物語っています。

佐伯の高僧

佐伯の高僧には乾堂・真誉・依教・廉州・鼎州・孝誉等が居た。

乾堂は養賢寺の住持にして一身に藩主高慶の信任を集め高僧の誇り高かつた。一夜高慶が突然乾堂の室に乗り込んだ時、乾堂は炬にかけた粥を食べている所であつた。高慶は今煮ている物は何かと詰問した。

乾堂は老いて台所の流しにざるをかけ、集めた飯をほして保存し今粥に作つて食べている所だと答え、益々信任を厚くした逸話が残っている。

真誉は潮谷寺の住持にて広く經典に通じ、よく戒律を守つた高僧である。廉州は切畑洞明寺の住持にして、よく禅理に通じ声明広く知られ、藩は進めて城下町外衆寺の上とした。依教は大日寺の住持にして、学徳高く藩命により尺間山に登り、雨を降らせて自ら持参した蓑笠を着て山を下つたと言ふ。

鼎州は養賢寺の住持にして、博学で禅理に明るかつた。第一回の長州征伐の時使して流血惨事を見ずに終つたのは鼎州の力であつた。孝誉は潮谷寺の住持にして博学を以つて知られた。

(増村隆也著「佐伯雜記(六)」による)